

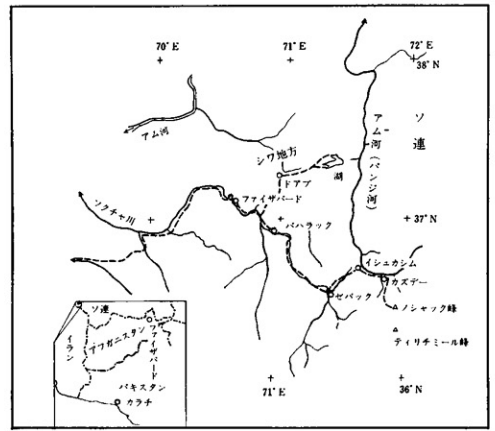
パミール高原の旅

沢田 秀穂

筆者は1960年夏京都大学学士山岳会のパミール隊の一員として アフガニスタン パミールの一部を踏査する機会を与えられた。隊長は茶の権威 静岡大学農学部酒戸弥二郎教授 総員6名というこじんまりした隊であった。在日アフガニスタン大使のマジット博士と文部大臣ポポール博士の好意ある骨折りによって 当初希望していた ワハンの谷深く入ることはできなかったがそれでもこの谷を15kmばかり入ることができ おもな目的のノシャック峰(7,490m)の登頂にも成功し その上多年邦人が旅行を望みながら果さなかった シワ湖方も訪れることができた。

パミール高原は世界の屋根といわれるだけあって 6~7,000m級の峯々が肩をならべている高原で 東にはタクラマカンの沙漠 北にはフェルガーナの盆地 西にはトルケスタンの草原 南にはパキスタンの山々をひかえてまさに山の王座という所である。ワハンの谷とパキスタンの谷との間のノシャック峰をふくめた山々は南西から延びてきたヒンズークシ山脈で この山脈の最高峰は7,700mのティリチミール峰 このノシャック峰はこれにつぐ第2の高峰である。

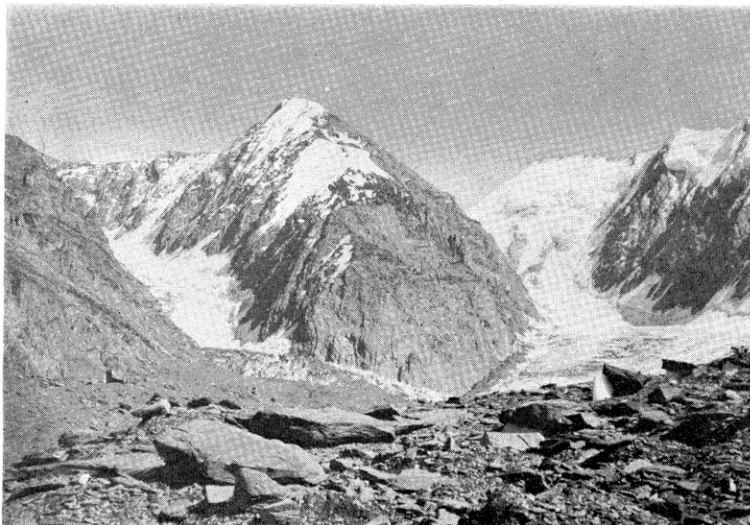
パミール高原は 南東から延びてくるヒマラヤ・カラコラム山脈がヘルメットの形をして折れ曲り 南西の方



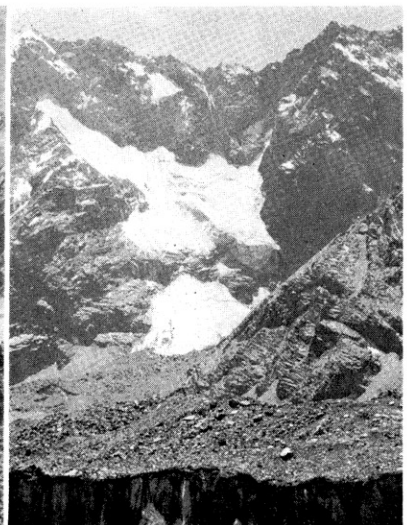
踏査位置図

ヒンズークシ山脈となって走り去るところのヘルメットの頂部にあたる。パミール高原の地質をみると 原生代とよばれる14.5億~5.5億年前の古い時代の地層から 1億年前後の地層までが花崗岩などと共にほぼ東西の方向にならぶ。これらの地層は 日本からインドネシアビルマを経てヒマラヤにつながり さらにアフガニスタン イランから遠くアルプスにおよぶテーティス海とよばれる巨大な古い地質時代の海の堆積物の一部で その後これらの地層は褶曲上昇してヒマラヤ・カラコラム・ヒンズークシなどの高峻な山々となったものである。

アフガニスタンの首都カブールから双発のDC-3機に乗ってこのヒンズークシ山脈を越すと この高く険しい山々はぐしゃぐしゃにもまれ 所々に花崗岩をくさびのように打ち込まれた片麻岩でできていることがわかる 山頂の峰々はいずれも飛行機よりさらに高くそびえ 青緑色にすきとおった氷河をふとこにいでいて 左右の窓にせまってくる。この背骨の古い山脈の北側にははるかに新しい中生代の石灰岩がなだらかな丸い屋根の



5,000m付近 左から支氷河が入ってきている 手前の主氷河上は粘板岩の氷堆石がのっている



支谷の黒い粘板岩の壁にかかる氷流 手前は主氷河の氷壁

形をして連なり さらにそのすそには風がはこんできて
 現在たまりつつある黄土の厚い層がみられる。 この黄
 土の平原が先に述べたパミール高原の西にひろがるトル
 ケスタンの草原の南縁で 昔の東西交通の要路「絹の道」
シルクロード
 の1部ともなった所である。

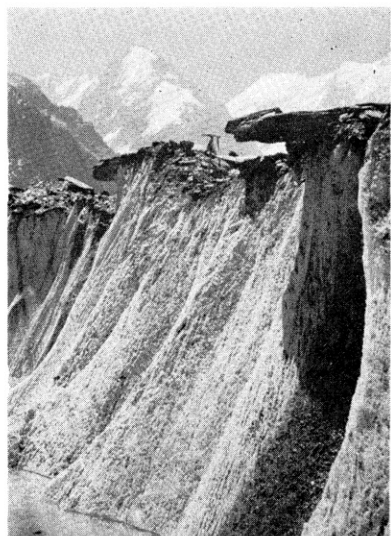
アフガニスタン領内のパミール高原はバダクシャン州
 に属し その首都はファイザバードである。 ヒンズー
 クシ山脈の北の端にあたり 谷底の片麻岩の上に緑の多
 いこの町がのっている。 これから奥は片麻岩 花崗岩
 などの深い谷で はるかにみあげる山頂のあたりには
 ひきずり込まれるような深いコバルトブルーの空をバックに
 きらきらと氷河が光っているのが望まれる。 谷
 のまん中や 山腹には古いモレーン(氷堆石)が巨大なつ
 み重ねとなつてうずくまわいて 大きな転石を道に落
 しては われわれの車のゆくてをはばむ。 ファイザバ
 ードから南東に走っていた谷が北東へと直角に曲がる所
 がゼバックの平原で 三角形の緑の湿原にはいつも陰気
 な風が音をたててふいている。 この平原は 南からパ
 キスタンとの国境に平行に流れてきた川と 北東ソ連との
 境近くからの流れとの合流点で 一時は湖のようなも
 のであったかもしれない。 現在の三角平原の半ばから
 東にかけて幅3km長さ15kmほどの小さな地帯に 地質的
 にはごく新しい礫層がたまっている。 この礫を堆積し
 た盆地はあるいは今の三角原の先祖のようなものであ
 ったかもしれず 礫は比較的近い所から運ばれてきたかも
 しない。 現在はこの礫層帯のびと同じ方向にちよ



第2キャンプから主氷河をみあげた景色 右の峯は
 パキスタンとの未確定国境

うどまん中あたりを断層が1つ走っていて その東と西
 とでは礫層の色が赤と灰色とにちがっていて 断層の見
 本をみるような所もある。 この礫層の中を流れる川の
 川原には礫がルイルイとして荒れはてているが 礫層が
 なくなって その下にあった粘板岩が地表にでてくると
 谷はおだやかな草原となり 牛や羊がのどかに草をはん
 でいるのは 粘板岩は風化して軟らかい泥になるからで
 であろう。 小さな峠をこえて ソ連国境の村イシュカシ
 ムにおりる。 これから先がパミール高原の中に深く入
 りこむワハンの谷である。 イシュカシムの村は片麻岩
 とごく新しくできた扇状地と段丘との上に散在する。
 対岸のソ連領の村も地図によればイシュカシムといわれ
 これも片麻岩と扇状地の上にすわっている。

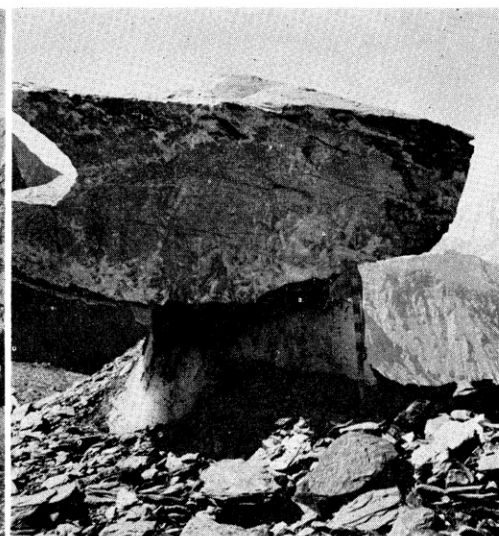
ワハンの谷は地図の上では深くけわしく通過しにくい
 道のようにみえるが 少なくともわれわれの歩いた15km
 ほどの間は「絹の道」に似つかわしく やさしく美しい
 底の広い緑のプロムナードである。 枝谷から押し出し



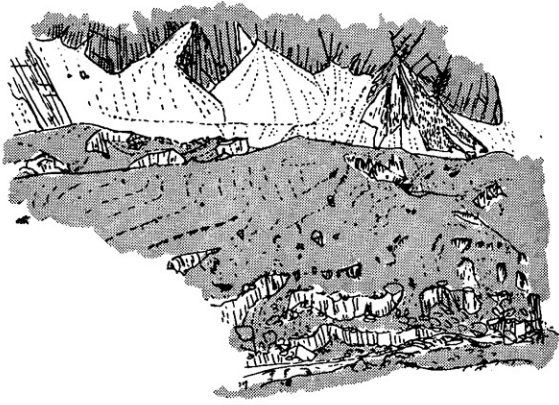
4,500m 付近 主氷河の表面の氷壁 ビッケル
 の長さ約70cm 氷河上の氷堆石の厚さがわかる



4,300m 付近 岩壁に氷河からの細流と粘板
 岩の葉理



5,000m 付近 主氷河上の氷河卓 岩は粘板岩
 ビッケルの長さ約75cm



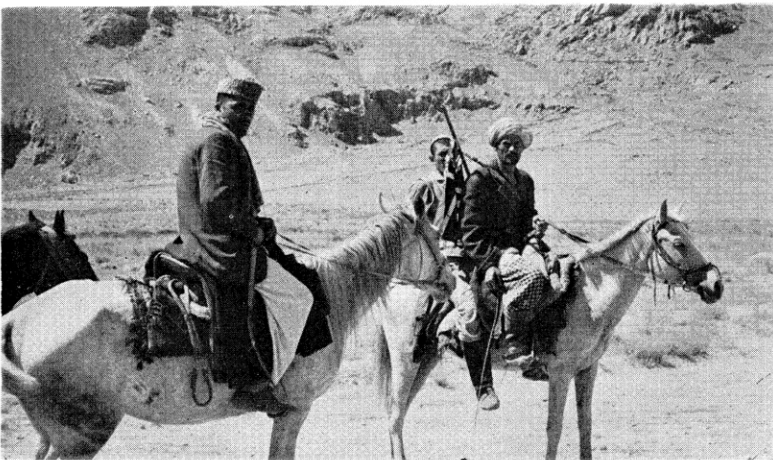
第2キャンプ 南西の主氷河 氷堆石の下から氷がのぞき 手前に氷河の上を流れる川がみえる

てきたまっ黒な粘板岩のモレーンをこえると ノシャック峰からの谷がワハンの主谷にひらいている カズデーの部落はすぐである。片麻岩の中に花崗岩が入りこんでいる地質学の標本のような崖と 大きな岩のかたまりの下に浸食をまぬかれて残った土が コケシのようにたっている土柱が人目をひく。すぐ目の前には幅50mばかりのアム河(この辺ではパンジ河という)を越えてソ連の農村がのんびりと人声のきこえる近さにうずくまり その上には一気に7,000mばかりの氷河のかかった峰が片麻岩と花崗岩らしい岩肌を真夏の日の下に かがやかせてそびえている。われわれのベースキャンプはここから南へ10kmあまり入った所にある。この枝谷は両

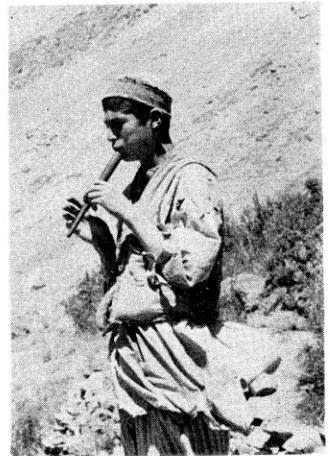
岸のきり立った深い谷で 片麻岩・片岩・粘板岩などからできた急な崖と その途中にひっかかって残っているモレーンがみられ ベースキャンプ近くになると花崗岩の仲間がこういう岩をぬってきて 熱て固くなったホーンフェルスという岩もあらわれる。キャンプは海拔3,080m そのうしろ北側の崖には白い岩が滝のようなかたちに見える。これは巨晶花崗岩の岩脈が一番下で幅15m ばかり高さ200m 以上 滝をさかさにしたように上方に向かって枝わかれているのがよくみえる。キャンプのある小さな三角の盆地には南から主流 東から支流がながれ込んできているが 主流の方は氷河ですりくだかれた黒い粘板岩の粉をふくんで黒く 東からの支流は花崗岩の粉で白い。

ベースについたのは1960年7月16日で 翌17日の6時の気温10°C 最低気温6°C 最高29.5°C で支流の水位は低かった。これがその後気温がしだいに高まるにつれ 氷雪の溶け方もひどくなり 水位は温度の上昇と平行してのぼり 夜昼となく大きな岩塊の河中をころごるひびきが岸から100m ばかりのキャンプサイドまでごろごろと つたわってきた。川の水は 川の岸近くに柳の柱を立て5cmごと刻み目をつけてあらましのと

時刻	8月7日		8日		9日			10日			11日		
	気温°C	水位cm	気温°C	水位cm	気温°C	水位cm	水温°C	気温°C	水位cm	水温°C	気温°C	水位cm	水温°C
6時	+6.5	-27	+4.0	-23	+5.0	-14	-	+6.0	-18	+3.5	+6.0	-15	+3.5
9時	-	-29	+20.5	-23	+20.0	-15	+5.5	+21.0	-20	+5.0	+20.5	-20	+5.5
12時	+25.0	-15	+25.0	-12	+26.0	-5	+9.0	+26.5	-5	+8.0	+27.5	-5	+8.0
15時	+26.0	-10	+26.5	-2	+22.5	+1	+8.0	+28.0	+2	+8.0	+28.5	+5	+8.0
18時	+17.5	-8	+17.0	±0	+18.0	-1	+6.0	+19.0	-3	+5.5	+19.5	+6	+5.5
21時	+13.0	-15	+13.5	-7	+14.5	-9	+5.0	+14.0	-5	+4.5	+15.0	+2	+4.0



ワハン谷を加路につくわれわれを見送るカズデー村長(右) (左)はソハン部隊長の僕人



3,000m 付近で笛をふく少年

ころをはかっていたが 下表のような経過をたどって遂に柱はおし流されてしまった。 この結果でみるといずれの観測値も1日1日と上昇し各観測値の1日の変化の形は毎日よく似ている。 ただし 水位は15時または18時 水温は12時または15時が最高で両者が同じ値を示すこともあった。 いちじるしいことは太陽が直射しはじめると気温は急上昇し 陽がかげると急降下する。 次に4,500m 付近に設けられた第2キャンプに上ると8月

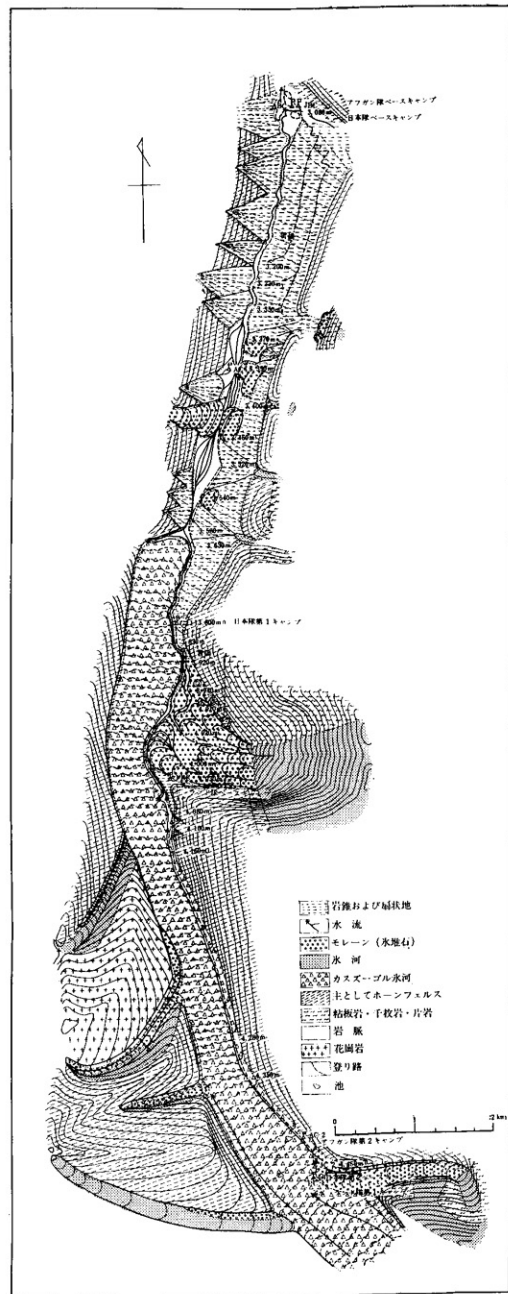
	気 温		
6 時	+ 5.0°C		
9 時	+ 15.0		
12 時	+ 16.0		
15 時	+ 11.5	くもり 風あり	
18 時	+ 4.5		
21 時	- 0.5	快晴 風なし	

20日 で 上記のような値であった。 そして湿度が低く 暑さ寒さいずれにしても楽である。

ノシャック峰から押し出してくる主氷河は長さ約15km 幅約1 km アフガニスタンでは屈指の大きさの氷河であろう。 第2キャンプから下は表面を黒い粘板岩のモレーンでおおわれ それより上流ではモレーンが表面にない白い氷河となる。 兩岸は主として粘板岩・片麻岩で 花崗岩・ホーンフェルスもみられる。

12 日			13 日		
気温°C	水位cm	水温°C	気温°C	水位cm	水温°C
+ 7.0	- 10	+ 3.5	+ 8.0	- 2	+ 3.5
+22.5	- 10	+ 5.5	+22.0	- 5	+ 4.5
+26.0	- 4	+ 8.0	+26.5	+ 5	+ 8.0
+28.0	+ 10	+ 7.5	+29.0	+ 17	+ 8.0
+19.5	+ 10	+ 5.5	+19.5	+ 15	+ 6.0
+15.0	± 0	+ 4.0	+16.0	-	+ 5.0

(水位観測柱流失)



カズデーゴル氷河地質見取図



予想外の悪路とたたかいながら輸送の重任を果たした広瀬隊員(左)と護衛渉外官ナビ大尉・沢田技官



小さな谷の出口で砂礫に埋められたわれわれの車 氷河のとけた水のためみるみるうちに埋まったが 翌朝はワソのように水が引き車は楽に上った



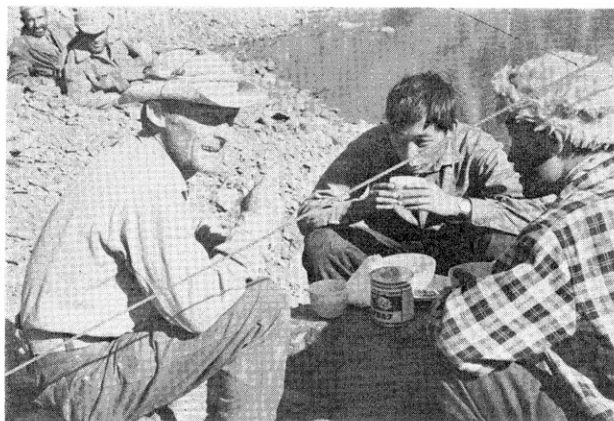
第2キャンプ付近 岩石はホーンヘルズと手前が主氷河向こうから小さな枝氷河が入ってくる

山頂は登頂者の言から推定するとホーンフェルスでその東の高峰は花崗岩 途中の尾根は粘板岩・片岩というところらしい。なお この分水嶺の南側には長大な氷河が数多くみられ また北側は快晴で雲1つないとき南には雲がひしめいていたという話で 南のインド洋側からもたらされた水分は 分水嶺にあたってほとんど全部その南側におちてしまい 北側には南ほどの大きな氷河を作るだけの降水量がないのであろうと思われた。

ノシャック峰登頂ののち 帰路アフガニスタンで最も有名な湖の1つシワ湖を訪れることになる。マルコポーロが病をいやした気候絶佳の地バダクシャンの湖シワの名は アフガニスタンを訪れる外国人には早くから知られ 誰もが一度は行ってみたいと願う神秘境である 今までにここを訪れた外人は数えるほどで 日本人ではわれわれがはじめて 私にとっても全然未知の処女地だし 湖の成因を知ることができればと胸はふくらむ ファイザバード東南東約40kmの村バハラックの盆地の北西部に注ぐ川をつめ 600mの急な山腹を登りきると急に目の前に展開するのがシェーワの牧地である。話にきいての想像では たぶん湖のほりにある緑地であろうと思っていたのが 案に相違して 湖の周囲にはほとんど平地がなく 湖までの谷すじが牧地とわかる。ほぼ

南北に20kmの間 延々と連なるこの牧地はみごとな^{テラス}段丘で上流はこれをきざむ川も幅がせまく浅くて 段丘も一段であるが 下るにつれて川床は広くなり 段丘も数段現われてくる。この南北方向の牧地の北端には ドアブ(二つの河の意味)という部落があるが その南には20mから90mの高さの段丘が3段もある。段丘の上は砂礫のおおう乾いた平原であるが 川床は草を敷きつめた緑の牧地で 遊牧民のテントや炉の跡が馬フンとともに無数に散在する。ドアブの村から先は谷は東が上流の東西方向となり 川は深く 段丘は面積が一般に小さくなる。兩岸の段丘の上には定住農民の家が点々と散在し 大麦・燕麦などが作られ 遊牧民の牧地は左岸の段丘の上にみられる。湖に近づくると畑がなくなり 谷間の緑地が牧地となる。

シワの湖は湖面が大体海拔3,000mのせきとめ湖 2つの峡谷がであった所で大きなモレーン(山崩れをともなったものかもしれない)のためせきとめられ 上流側に谷の水がたまってできたものである。サガミ湖など日本で多くみられる人工のせきとめ湖と同様のもので コンクリートのダムの代りに山崩れの土砂のダムを考えれば いい。湖は西に向かって開いた片カナのフの字の形をしていて 北の谷は約5km 南の谷は約9kmの長さで水をためている。現在のところ水があふれていないが もとはアム河に注いでいた谷である。湖をせきとめたモレーンの丘の向こうには ソ連パミールの高峰が連なり 頂上には氷河がキラキラと輝いている。夏の間シェーワの牧地に放していた家畜をつれて アム河ぞいに住む^{フロンド あおいか しらいはだ}紅毛・碧眼・白哲のシグノン人が湖のほとりの花崗片麻岩の上の細かいふみ路を下っていく。空にはようやく雲が多くなり 湖を離れる日には雪がわれわれ一行をおそってきて 夏は遊牧民とともにすでに遠く去ったことを知らされた。(筆者は 地質相談所)



第2キャンプを訪れたポーランド隊のカメラマン 右から吉井副隊長・広瀬隊員・カメラマン 左後方アフガン兵と人夫



ノシャック谷の入口 カズデー村の牧地と調査隊のテント

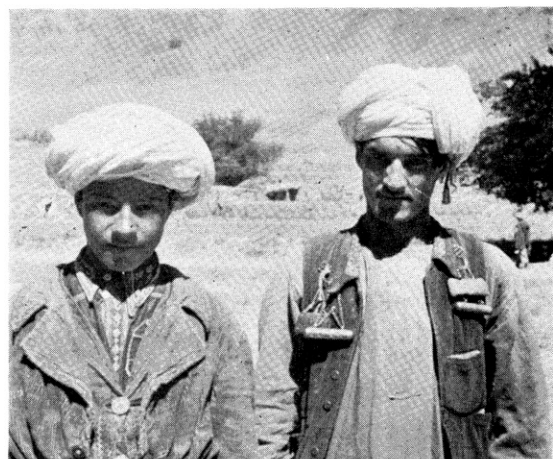


登頂を終えて帰路につく一行 右から酒井隊員・酒戸隊長・護衛渉外官ナビ大尉・沢田技官



→
円筒はポーランド隊の食物ケース この中にビスケット・ミルク・チーズ・パン・乾果など13人1日分の食物が入っているベニヤ板製 文字はポーランド ヒンズークシ探険隊と書いてある

3,080m の日本隊のベースキャンプ



バハラック付近で土地の兄弟 美しいシシュウをしたシャツをきてお守りをもっている



クンドーズの陶器工場に働くアフガン人の男女 ベールをとった女子工員 2年前まではこんな光景は夢にもみられなかった



クンドーズの小学校 日本人そっくりの子供もいる 机の上の小さな板で字の練習をする



バハラック 農夫が原始的なスキで風揚をしている 脱粒した収穫物を空中に投げ上げて風によって麦とカラとをわけ